最優秀賞「雨に濡れても心は錦」加藤利光

朝日新聞社賞「凜として」山田康

全日写連賞「雨やどり」鈴木静子

入賞作品の講評

「雨に濡(ぬ)れても心は錦」＝雨がやむのを待つ一人ひとりの表情がよく捉えられている。踊り子の面々は「間もなくあがるだろう」と期待に満ちて明るい。彼らの胸裏では、すでに雨があがっているとさえ思わせるではないか。誰にでも撮れそうなショットだが、経験からくる直観の裏打ちあってこその撮影である。

「凜(りん)として」＝人物写真は被写体になった者の表情こそがモノをいう。この作品は祭りの衣装を飾る女性の美しさが際立った。カメラマンは、人ごみの中から誰のどんな点に美を見いだすのかが問われる。山田氏はこの人物を見つけて美を感じ、作品に昇華させた。その美学は作品を見る者に共感を生むはずだ。

「雨やどり」＝祭りの写真は華美になり過ぎるが、この作品は抑制の美が表出された。何よりモノトーンのコントラストが美しい。祭りの華やかな色彩よりも形を表現しようと考えたのだろう。その意図は美しさを伴って伝わってくる。

（写真家　宮嶋康彦）